

詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 23 号
2023 年 3 月

目次

| | | |
|------|-----------------|----|
| 伊東友乃 | 春の7行詩 | 2 |
| 画図佳織 | ひとつのはじまり | 4 |
| 関根全宏 | 間(あわい) | 6 |
| | 月明——石原吉郎によせて | 8 |
| | 空き瓶 | 10 |
| | 異国のコインランドリー | 12 |
| 永松佑香 | 金魚 | 13 |
| | スノードーム | 14 |
| | 我世界 | 15 |
| 清水みほ | ボンボンシヨコラ | 16 |
| | 香水 | 17 |
| | 自分教 | 18 |
| | 各駅停車 | 19 |
| 渡辺信二 | ひまわりのエチュード5篇 | 20 |
| 鈴木順三 | 「蠢動(しゅんどう)」(表紙) | |
| | 「蠢く(うごめく)」(裏表紙) | |

春の7行詩

伊東友乃

1

腰から上に落ちた影が
いよいよ春がやってきましたの合図で
その影を指先ですくって
壁に塗りつけでもしたら
芽がそこから生えて
春の緑でふかふかになればいいのに
みんなもういちど眠るために

2

こぼれる というか今にも落ちる状態で
咲いている花が
チラチラと目の奥を刺激してきて
春を首まわりに感じる
挨拶してくれた人に
ぎこちない挨拶しかできなくて
それでも良しとするこんなお天気の日には

3

まっげがいよいよ伸びて

その影がふさあと羽のようにかかるものなので

なんともうるわしいうつむき顔

鼻声になりながら

恋と一緒にやってきた花粉たちに

文句をいって

全体的にぐずつく甘ったるい午後

ひとつのはじまり

画図佳織

その声は

水たまりのうえで

踊る光のようで

くたびれることがない

指先に

草の実の汁や

湿った土をつけた小さな手には

陽だまりを隠している

綿毛のつぎに

やわらかな髪は

この世になじんでいない証拠だろう

そばにいるのに

遠くにいつてしまいそうな

後ろ姿は

どこからきたのか

確かめようのないはじまりと

はじまったからには

終わりがあることを
知っているのか
笑顔はいつも
新雪よりもあたらしい

間（あわい）

関根全宏

墓穴に入ることは わびしい
あなたとの記憶
死体に刻まれたかすり傷のような
記憶の擦れが
開かれた墓穴の入口のまえで
ひりひり疼く

私があなただを吊う
あるいはあなたが私を
吊いは返される
風は断えた
深みが増す
たちつくすひとつの影が
地におちる
痛みにゆれ
骨がきしむ
ひき返すすべはない
もどる場所もない

この墓石のしたの薄明のなかで
死者と賑わおうとも
生きるものの涙の
ひと雫の波紋が
暗い眠りのなかでゆれようとも
ただ待っただけだ
閉じられた入口が
ふたたび開かれるのを
ざらついた暗い空と
さらに暗い空とのあわいで
強いられる忘却のなか
落日をかぞえながら

月明——石原吉郎によせて

関根全宏

ぼくが忘れてきた男は

月の傾きなど

気にもとめなかった

月明かりは いったいどうに

かなしくなかなかつた

かなしくなる予兆など

あるはずもなかつた

青春の遺骨を

おのれの胸に抱き

おのれの胸に

死者を葬った

いまや月明かりは

ぼくらの眠りをてらす

闇に月が点り

月が燭を点ずる

影がゆれ

月が傾く

影が左右にあるかぎりは

儀式はおわらない

このちも

ぼくらにまといつづけるのは

月明かりなのだ

怒りにすら到らぬ

月明かりなのだ

空き瓶

関根全宏

死んだきみのことを思い 生ぬるい空気の中

ぼくは気を紛らわせようと 外に出た

夜風にあたると 鬱屈した気持ち晴れる気がした

隣の家に立ち並ぶ大きな木は 夜には存在感を増し
じつとぼくの方を見ていた

根は堆積する時間の奥底から水を吸い上げ

枝は広大な空にむかって葉をつけ落とす

その反復

その間に どれだけの命が行き交うのか

胡蝶蘭が育てられている大きな温室の裏手に

竹林が鬱蒼と生い茂る

斜め向かいの家の二階は まだ灯りがあつた

地下で水が流れる音がした

隣の古いアパートには

猫が何匹も棲みついていて

今は一匹も姿が見えなかった

すぐ側にはまた新しい家が建つ

区画も歩道も整備され

木材が積まれていた

その更新

道端に供えられていた花

あの小さな空き瓶は

いつの間にか なくなっていた

夜風はぬるい

空には薄い月が浮かんでいる

爪のようだね

というきみの声が聞こえた

異国のコインランドリー

関根全宏

アンディは読み書きができなかった

一緒に住み始めたときも

けれども流暢に話すことはできた

彼がいつ祖国から逃れてきたのか

話してくれたけど覚えていない

彼は同じカジノで何年も働き続け

ある日突然 颯爽と街を出ていった

新しい家族のもとに行くんだって

それからどうなったのか分からないけれど

たまに思い出すんだ

晴れた夏の日のコインランドリーで

洗濯機がまわるあいだ

二十五セント硬貨を弄びながら

彼が話してくれた

ひと泡吹かせて逃げる奴の話を

金魚

永松佑香

透明な鉢の中でゆらゆら揺れ動く
君はとても神秘的で
一目見ただけで目を奪われた

少し濁った水中で
少し生きづらそうに
寂しさを纏ったその幻想的な尾ひれを
揺らしていたのだろう

水草と一緒にゆらゆらダンスする
君はとても気楽そう
でもどこか退屈そうだった

君は一体その狭い世界で
何を感じていたのだろうか

ゆらゆら揺れ動く
綺麗だった君へ

スノードーム

永松佑香

その球体の中には夢が詰まっている
白く散りばめられた雪景色は
特別な一日を思い起こさせる
そんな世界

白銀の世界が水中に溶け込んでいる
明かりに照らしてみると
誰かを祝福しているみたいに輝きを増す
そんな世界

でもね
気を付けて
壊れるときがあるから
割れ物注意

我世界

つま先に身も心も委ねて
赴くままに時を忘れる
呪文のような珈琲を連れて
一人掛けソファに溶け込む

清水みほ

ボンボンシヨコラ

清水みほ

選りすぐりの6個

お揃いのコートを纏い
身を潜める

口内で知らしめるんだ

他の子に無い魅力があるんだって
人格泥棒なんてさせないんだ

香水

清水みほ

今日はどれにしよう
綺麗に並べた香水に手を伸ばす
気に入って買った香水
少し酔っちゃうけど
何かになりたくて なれる気がして
魔法のヴェールをくぐり抜ける

一日かけて変わりゆく香り
時間をかけて変わりゆく私
小悪魔を忍ばせたレディになれるように
背筋とスカートのしわを伸ばして

自分教

清水みほ

偉そうに持論を遺す人たち

誇らしそうに経験を語る人たち

レールの上を歩かされる

無知な私たちは

未知なことに

不知のままではいられず

どこかで聞いた誰かの持論を引っ張り出す

都合の良い誰かの言葉を借りたくて

抽斗を探ねる

やがて都合良い自分教を確立する

各駅停車

清水みほ

葉の色が変わる

台所の柱に背を合わせた線が増える
遅しかった父に祖父の面影を感じる
母の微笑む目尻に小じわが刻まれる
祖父母が小さく小さく感じる

そうやって

そうやって電車は進んでゆく
各乗車駅から各降車駅まで

同じような風景に欠伸していた
気づくのはいつも寝過ぎた時

目の前で閉まるドア

呆然と手を振り返す

失うまで気づけない時間と別れ

ひまわりのエチュード5篇

渡辺信二

4

今 生命がナミアゲハとなって

戯れ

飛翔し

乱舞する

その姿のままに

ひまわりの中で

吸蜜の喜びとともに

最期を迎えよ

秋を待って

蜘蛛に捕食されるか

寒さに凍死するのか

むしろ この細い茎の先

2メートルの高さ

輝く黄金の中に 静かに横たわれ

6

詩人が路傍に見たのは
車塵を浴び
重たくうなだれた
ひまわり 一本

人びとが憩いを求める広場
噴水が わづかに 濡らす
この乾いた宵
太陽を見つめる姿勢に疲れ

足元を吹き抜ける
涼風に 秋を知って
ひまわりが 首を折る

どこかで 一斉に
クラクションが鳴る
決して 弔鐘ではないが

7

亡霊のように
萼と花びらを面前に枯らして

葉を変色させ
乾きに身を委ね

雨に晒され
風に震え

全身を大地の色へ
垂らしてゆき

枯れ
沈む 生命の

秋を待つて
種子を弾き散らし

急がず
倒れてゆく

英二さんは 二十代 フルトン魚市場の
アルバイトをしながら
グリニチ・ヴィレジで ひまわりを描いた

次第に 貯えを無くし
スタジオを借り続ける余裕なく
ニュージャージーに移って

なお ひまわりを描き続けた 一度だけ
マンハタンで開いた個展会場は 友人知人の
溜まり場となり 英二さんは嬉しそうだった

しかし 絵が売れず 展評も出なかった
五十代半ば 故郷の熊本へ戻り
最後の個展を鶴屋デパート八階で開いた

その二月後 アゲハ蝶とともに
英二さん 旅立つ

10

ひまわりが歩くと聞いた

本当なのか？

ならば わたしのうたの中を
歩いて欲しい

寄り添う言葉に 身を任せ

遠くに見える結末に向かつて
うたの中を歩けば

太陽の光が

ひまわりを目掛けて
躍動する

大気のエネルギ―は

苦悩と苦痛を払って
一斉にたゆたう

ひまわり おまえ 常に新たな一行

寄贈詩誌・詩集等は下記『立彩』編集室宛てにご送付をお願いできれば幸いです。

〒173-8602

東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学人文学部 関根全宏研究室気付

2022年9月1日以降に贈られた詩誌等一覧

詩誌

『コールサック』110号、111号、112号。

『白亜紀』164号。

『万河・Banga』28号。

『りんごの木』62号。

『GATE』34号。

詩集

小野恵美子『20cm』土曜美術社出版販売、2022年。

神谷毅『焔の大地』コールサック社、2022年。

ジュリエット・コーノ『ツナミの年』牧野理英訳、小鳥遊書房、2020年。

藤井建夫『終活で見つけた僕の青春：詩と短編集』恒星社厚生閣、2022年。

その他書籍・論文・エッセイなど

ハーマン・メルヴィル『ピエール：黙示録よりも深く』上・下、牧野有通訳、幻戯書房、2022年。

神坂泰行『自由韻文詩の世界—現代自由詩の再興—』文芸社、2022年。

巽孝之『慶應義塾とアメリカ』小鳥遊書房、2022年。

小島まち子『懸け橋：桜と花水木から日米友好は始まった』コールサック社、2022年。

英詩研究会『Right Margin 詩の余白から生まれるもの』英詩研究会10周年記念詩文集、2022年。

富士川義之編『自然・風土・環境の英米文学』金星堂、2022年。

関西英米文学研究会『英米文学手帖』第60号。



詩誌『立彩』第23号 2023年3月20日発行

頒価 300円

編集発行 「立彩」

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学人文学部 関根全宏研究室気付

印刷 株式会社DTP 出版 TEL 03-5621-4531